

シリーズ 六ヶ所発 地域の魅力再発見

- タイトル1 美しい泊海岸 列島の成り立ち伝える
- タイトル2 アワビと丸木舟 豊かな海産物、俵物にも
- タイトル3 縄文人はどこから 精神性高い人々居住か
- タイトル4 月山とぼんてん山 山伏同士が争った名残
- タイトル5 中世の館・目代館 1000 年前の痕跡 目の前に
- タイトル6 お台場 海岸防備の拠点多く
- タイトル7 森林鉄道 出荷盛ん 天然ヒバ運搬
- タイトル8 エネルギー関連施設 新たな技術革新に期待

むつ小川原開発や核燃料サイクルなど、国策と共に歩んできた六ヶ所村。一方で縄文遺跡群の存在や、開発前の戦前戦後の足跡も数多く刻まれています。村立郷土館の鈴木浩館長が村の名所や歴史などを紹介します。（このコラムは令和6年11月7日から12月26日までの毎週木曜日、デーリー東北に掲載されました。）



① 美しい泊海岸 列島の成り立ち伝える



弥次郎穴。「泊のトトロ」と呼ばれている

六ヶ所村の北部には、美しいリアス式海岸がある。この海岸にある「弥次郎穴」と呼ばれる洞窟は、現在交流サイト（SNS）で話題となっている。アニメ映画「となりのトトロ」のキャラクター・トトロが横を向いている姿と、この洞窟の穴のシルエットが似ているということで、通称「とまりのトトロ」としてうわさが広まった。各地から見学者が来ていて、ちょっとした観光名所となっている。

この洞窟は、約9千年前の縄文時代の縄文海進の時に、海水面が現在より高かったころの波の浸食によってできた海食洞と考えられている。大きな岩山に断層が走り、もろくなった部分に波が当たり削られてできた洞窟だ。

実はこの洞窟がある泊海岸は今から約1600万年前、日本列島がユーラシア大陸からちぎれて現在の位置に流れてきたころの、浅瀬の海底火山の噴出物や溶岩の貫入などでできたりアス海岸だ。磯の岩場では、枕状溶岩や激しい海底火山の噴火の様子が分かる火山^{さいせつ}砕屑岩層（泊層）を手で触り体感できる。

泊海岸にはこの弥次郎穴のほか、^{かいしよくがい}海食崖から流れ落ちる「滝の尻大滝」や、大きなベンチのように横向きの柱状節理、その先端部分では板状節理も見られる「タタミ岩」がある。

満潮時にはクジラの潮吹きのように約7～8メートルの高さに潮を噴き上げる「ぼっとあげ」、岩場の中には真っ白な「白砂」と呼ばれる砂浜、古墳時代の3人の人骨が発掘された「大穴洞窟遺跡」を見ることができる。この3人は7カ月の幼児、10歳の少年、50歳代の男性の骨で、親子にしては年齢が離れている。なぜこの洞窟で亡くなったのか謎が深まる。

大穴洞窟には天然記念物のコウモリがすみ着いていて、洞窟に入るとバタバタと飛び回る。3年かけてやっと顔の撮影ができ、キクガシラコウモリだと分かった。

泊海岸では6月になると、高山植物のニッコウキスゲやスカシユリ、ピンクのぼんぼりを付けたエゾネギやノハマショウブなど、ロックガーデンのように花々が咲き誇る。10月にはコハマギクが咲き乱れ、岩場には多肉植物のコモチレンゲも見られる。奇岩や絶景、そして、美しい海岸だけでなく日本列島の成り立ちをも学ぶことのできる魅力ある海岸である。（鈴木浩＝六ヶ所村立郷土館館長）

② アワビと丸木舟 豊かな海産物、俵物にも



カッコ船によるアワビ漁

海と山に囲まれた六ヶ所村の泊地区では、豊かな海産物が古来から人々を魅了してきた。2004 年、泊小学校新校舎建設に伴う発掘調査で、縄文時代前期の円筒下層式土器が多数見つかった。この土器の文様を調べてみると、津軽に多い斜縄文の土器や、南部で多く見られる多軸絡条体のニキビのような文様の土器、泊で多く見られる単軸絡条体のすっきりした文様の土器があった。縄文時代から泊の豊富な海産物を求めて、北から南から縄文人がや

ってきていたこと、泊独自の地方色豊かな文化があったことなどが読み取れる。

江戸時代に泊海岸を訪れ、旅行記「おぶちの牧」を残した人物がいる。菅江真澄である。真澄は 1793 年冬、田名部を発して、平安中期の後撰和歌集に詠われている「おぶちの駒」が出たとされている尾駁の牧を一目見るために六ヶ所村を訪れていたのだ。

中山崎では村の子どもたちと遊び、憧れのおぶちの牧を目前に胸の高まりを感じていたに違いない。しかし、残念ながら、室ノ久保まで来ると雪も激しくなり、引き返してしまう。真澄は泊で乗り込んだ小舟から、磯でアワビやタコをとっている様子を目にしていた。

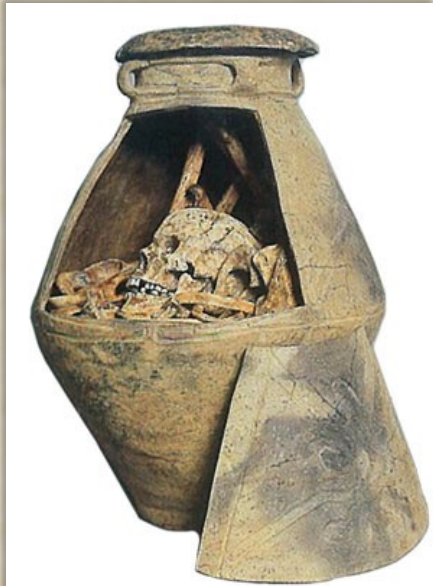
江戸時代には、田名部の山本理左衛門が六ヶ所を含む下北地方から、干したナマコやアワビ、昆布を長崎俵物として出荷していた。「南部史要」（1744 年）の南部藩北部の重要産物として「七戸泊湊は、鮑が上品」と記されている。

村立郷土館では、重要有形民俗文化財に指定されている「泊の丸木舟」を展示している。この舟は、樹齢 150 年以上のブナの大木をくりぬいた完全な一本作りで、日本に残る、海で使用された最後の丸木舟だ。

漁師自身が山に入り、大体の形に彫り込む船作り（フナウチ）をし、里に下ろしてきて船大工に仕上げてもらっていた。小回りが利き、岩にぶつかっても壊れず主に冬のアワビ漁に使用された。「家にいる男手の数だけあった」といわれるほどたくあんあり、明治から大正にかけて多く製造された。当時、磯の漁期になると、海は一斉に出漁する丸木舟で壮観な眺めだったそうだ。

山麓の扇状地を通して流れるミネラルたっぷりの伏流水が、小川となり時には滝となって海に流れ出る。また、日本最大級の砂丘である猿ヶ森砂丘や黒々とした砂鉄層が見られる天ヶ森砂丘から鉄分などが溶け出し、海藻の成長を助けている。栄養たっぷりの昆布やワカメを食べたウニ、アワビは、独特の風味があり美味である。（鈴木浩＝六ヶ所村立郷土館館長）

③ 縄文人はどこから 精神性高い人々居住か



甕棺の中に人骨。「縄文美子」の発見

豊かな自然に恵まれたこの六ヶ所村には、先史時代から多くの遺跡があり、脈々と人々の営みがあった。1969年に「むつ小川原開発構想」が発表され、71年から91年までの長期にわたって発掘調査が行われ、当時としては青森県内最多の46冊の報告書が出された。

尾駁沼周辺から、約1万年間続いた縄文時代の遺跡群と弥生時代の大集落跡が見つかり、平安時代の大和からの移民とみられ鉄を持った人々の歴史がよみがえり、六ヶ所村立郷土館にコンテナ数で5113箱ほどの遺物が保管された。特に縄文時代約1万年にわたる歴史を展示しているのは全国でも珍しく、この郷土館の強みでもある。

来館者から「初めて六ヶ所村にやって来た人は、どこから来たのか？」と、よく聞かれる。縄文時代草創期の表館(1)遺跡からは、底が尖ったとても美しい隆起線文土器が、千曳浮石層（約1万2700年前）とその上位から出土している。北海道や朝鮮半島からは同様な土器は出土していないことから、本州の南の方から人々がやって来たと考えられる。自然発生的に土器作りが行われたのだろうか。

縄文時代中期では、日本最大級の集落である富ノ沢遺跡が見つかった。青森市の三内丸山遺跡と同時期の集落で、約4500年前に住居数が最大になった頃、三内丸山遺跡と同様に急激に衰退してしまった。寒冷化によるものと考えられているが、その後、東北地方南部の大木式土器文化圏の影響を強く受けた大集落が、少し離れた丘に突如出現するという現象が起き、六ヶ所では人口増となっている。新たな人々の流入と考えられるが、謎が深まる。

縄文時代を通して主に土葬が行われていたが、約4千年前の後期の初めだけ北東北だけが違っていった。1971年に弥栄平(1)遺跡で見つかった甕棺には、1体分の骨が入っていた。土葬の後、数年してから骨を掘り出して洗骨し、その骨を甕棺に収めて再び埋葬したとみられる。頭蓋骨の特徴や抜歯を2回行っていることから、20歳前後の子どもを1人産んだことのあるお母さんだと分かっている。再生を祈っての埋葬なのか、かなり精神性の高い人々が住んでいたのかもしれない。まだまだ未知の縄文時代の歴史がある。

世界文化遺産の「北海道・北東北の縄文遺跡群」には入っていないが、青森県のほとんどの市町村には、大変貴重な遺跡や遺物がたくさん存在する。それぞれの自治体が、地元の貴重な遺跡や遺物を紹介する企画や展示を行い、地域の活性化につなげて全県を挙げて「縄文王国青森」を盛り上げていきたい。（鈴木浩＝六ヶ所村立郷土館館長）

④ 月山とぼんてん山 山伏同士が争った名残



泊港に停泊する漁船。奥に見えるのが月山

六ヶ所村北部に月山とぼんてん山がある。頂上からは広大な太平洋を一望でき、数多くの登山客が訪れる。時折、村立郷土館に山の名前の由来を知りたいという問い合わせが来る。「なぜ山形県にある月山や、梵天というインドの神様の名前が付いている山があるのか」と。

実は、戦国時代から寺社が少なかった南部藩内では、本山派と羽黒派の山伏が活躍していて、六ヶ所村のある北部は、羽黒派山伏の勢力

範囲である霞であった。山伏が修行の際、棒の先に御幣を付けた神の依り代である梵天を持って山々を修行して歩き、この山に奉納したことから「ぼんてん山」と名付けられたと考えられる。現在、このような風習は秋田県や千葉県房総半島で見られる。秋田県内では、神社などの拝殿に五穀豊穡などの願いを込めて、梵天（ぼんでん）と呼ばれる祭具を奉納する伝統行事梵天祭が残っている。房総半島西部は、現在でも出羽三山（山形県の月山、羽黒山、湯殿山）への信仰が強く、三山詣でをした行人が頂いてきた幣束は竿の先に付けて梵天とし、土中に収める梵天供養を行ってきたそうだ。

月山については、「貴宝山神社縁起」によると、「1664 年（寛文 4）年、伊勢廻船問屋の佐藤宗兵衛が、泊の大乗寺で剃髪して広貞上人となり、後に泊山の峰に月山大権現のお社を建てた」ということから、月山と呼んだと考えられる。

貴宝山神社は本山派で、月山は本山派山伏の修行の場となった。昭和の時代に入っても、遠くは岩手県、八戸や三沢からも白装束の人々が大勢お参りに来ていたという。

羽黒派山伏の山に、なぜ本山派山伏が修行に来るようになったのだろうか。実は 1613（慶長 18）年、江戸幕府が修験道法度を定め、本山派と当山派を公式に認めたため、20（元和 6）年に羽黒派山伏の代表真田式部（法名・清鏡^{きよあき}）が、これまで通り南部領内で公式に活動を認めてもらおうと、三戸城の南部藩主利直に面会を申し出た。しかし、拒絶されて門前で切腹するという大事件が起きてしまった。

その後、六ヶ所村を含む北部は本山派山伏の霞となり、山の名前だけが残ったと考えられる。村の山々の名前は、山伏の勢力争いの悲しい歴史を物語っているのかもしれない。（鈴木浩＝六ヶ所村立郷土館館長）

2024.12.5（木）

⑤ 中世の館・目代館 1000 年前の痕跡 目の前に



目代館。現在の泊診療所付近

近年のお城ブームでは、100 名城を巡るスタンプラリーが行われ、さらに城の御朱印ともいえる御城印を発行する城が続出。青森県内でも御城印集めが注目を集めている。そんなブームが古城や山城にまで及び、ちょっとした人気となっている。

上北地方には古城が 95 ヲ所存在し、多い所で旧十和田市 28、旧七戸町 15、旧十和田湖町 17、六ヶ所村 7 である。この地域は、古くは奈良・平安時代以前から生活拠点として、中世から近世にかけては、

南部氏の支配戦略上、極めて重要な場所だったことが分かる。有名なのは本城の三戸城、拠点の城・根城、境の城・野辺地城などである。意外と身近な所にお城や館がある。

六ヶ所村の城郭は外見上気付かれないものが多い、河谷に臨んだ尾根や台地の末端を利用したものが多い。郭内外に住居用の竪穴があり、不意の敵の来襲に備えたもので、10 世紀後半～11 世紀に作られた防御性集落の特徴を示している。その構造が、北海道のアイヌの館「チャシ」と似ていて、蝦夷館と呼び名が付けられているものが多い。防御性集落は、一部を空堀で囲む上北型と、全体を囲む津軽型（環濠集落）がある。

六ヶ所村には、上北型の戸鎖館、鷹架沼南館、中志蝦夷館、内沼蝦夷館がある。内沼蝦夷館は、たくさんの竪穴住居跡のくぼ地がある主郭を広く取り、台地先端部に連なる細い基部を堀切で防御する小郭を多数設けている。防御性では県内でも 5 本の指に入り、12 世紀～14 世紀の南北朝の城館に似ている。そのほか、方形の郭と堀を有する安倍館。中世の城郭と考えられる目代館がある。泊地区にある目代館は、主郭や副郭、堀切、竪堀、虎口、腰曲輪などを有し、副郭内にある畑からは 2 枚の銅鏡が見つかった。

この目代館は明神川河口の北西部にあり、北側の舌状台地には削平された郭が複数見られる。北東側に稲荷神社が配置され、東側には町屋が形成されていたと考えられる。これは作田川の北側にある七戸城と貝ノ口、天王神社の城構えとそっくりである。

目代館の名は、中世の館主が根城南部の目代（城主の代官）として東通を支配していたため付けられたものだろうか。また、この目代館は「東北太平記」にある蠣崎蔵人^{かきざきくらんど}の乱のときの白糠城と、対峙した音波城の可能性も考えられる。ただし、当時の城主福士氏と現在の所有者目代氏との関係はわかっていない。現在でも村内に残る約千年前の館跡や空堀、多数の竪穴住居跡のくぼ地を目の当たりにできる。（鈴木浩＝六ヶ所村立郷土館館長）

⑥ お台場 海岸防備の拠点多く



館ノ上御番所のあった場所

江戸時代の初めごろから、盛岡藩は海岸防備を進めていた。1644（寛永 21）年 4 月 26 日以降、盛岡藩は 20 カ所の浦番改めを行い、同心を派遣している。田名部から八戸鮫までの北浜街道には八戸物見崎、六戸浜根井、東浦の泊、田名部の尻屋、尻労の計 5 カ所に裏番所を置いていた。

江戸時代末期の海岸大砲場図を見ると、青森県

南の北郡に海岸防備のお台場である大砲場を多数確認できる。六ヶ所村にもお台場があったのだ。外国船を見張る遠見番所は、野辺地村と六ヶ所泊村に 2 カ所記されており、大砲場は新旧を合わせると浜三沢と白糠村に 2 カ所、野辺地村、根井村、木ノ下村、百石村に各 1 カ所、そして現在の六ヶ所村内には 9 カ所あった。

1853（寛永 6）年 6 月のペリー来航を受け、56（安政 3）年 4 月、幕府の命令である公儀の達に基づき、南部藩主 利 剛 が領内を巡視し、泊、尾駸、平沼で大砲場を検分している。案内役は盛岡藩士漆戸茂樹だった。泊中山崎の大砲場では射撃を試み、田名部大間沖では砲艦の演習をさせ、6 月 11 日に盛岡に帰っている。

利剛公は、遠浅の砂浜にある尾駸と平沼の大砲場を批判していた。お供をしていた新渡戸十次郎は、利剛公に中山崎の改築を命じられ、八戸の櫛引八幡宮から引き返している。十次郎は、中山崎の中ほどと南手の大砲場を七戸の御給人、組衆と共に改修工事を行っていて、その絵図の写真が六ヶ所村立郷土館にあった。

そこで、元館長の平浜雅信さんと 2 人で、中山崎の大砲場跡を調査した。中山崎の南側はすでに宅地や畑になっていた。江戸時代末期の「海岸御台場御筒海岸砲台書」によると、南側にあった大砲は 1 貫目 唐銅筒 で、約 3.75 匁の砲弾を撃てた。今度は中ほどの大砲場跡を目指し、草むらをかき分けていくと四角く囲まれた土塁跡を見つけた。絵図の通りに残っていた。中ほどの大砲場には、割菱御紋付きの 300 貫唐銅筒が台座の上に据え置かれていた。口径は約 5 匁で長さ約 1.6 尺ぐらいの大筒。砲弾の重さは 300 貫目で、約 1.275 匁のテニスボールぐらいの砲弾が 1～2 匁は飛んだのだろうか。

北側に行ってみると草地に小さな祠があった。遠くに下北の尻労が見える。北側は木砲で、戊辰戦争でも使われていたが一発打ち払うと壊れてしまったという。当時の海岸防備の危うさが垣間見られる。六ヶ所村中山崎の大砲場から望む太平洋の青さに、近代化に踏み出していった日本の歴史の一端を感じられる。（鈴木浩＝六ヶ所村立郷土館館長）

⑦ 森林鉄道 出荷盛ん 天然ヒバ運搬



森林鉄道機関車と笑顔の人々

六ヶ所村北部に広がる山岳部には、かつて天然ヒバ林が広がっていた。江戸時代、泊港は青森ヒバや^{まさざい}杵材の積み出し港だった歴史があり、泊にある月山は盛岡藩の御山であった。南部藩の「雑書」には1649（慶安 2）年 8 月、閉伊郡宮古町の者が^{かさくまさ}家作杵 10 万枚を泊村で買い入れ、小船 2 艘で泊浦から宮古まで運んだとある。また、1695（元禄 8）年 9 月には、泊村の権七が^{むつのかみ}陸奥守様（仙台藩）御用材木を積み出している。泊の山の木材市場とし

ての価値と、泊村の材木商人、船頭らの心意気も察せられる。天然ヒバにまつわる歴史があった。2020 年 1 月、六ヶ所村二又在住の秋戸淳一さんが 1 枚の写真を持って郷土館に来られた。よく見ると小さな機関車の前に 4 人の方が写っている。左から 2 人目が淳一さんの父慶典さんで、機関車の運転助手をしていたという。話を聞くと、郷土館の裏山で切り出されたヒバ材をトロッコに積み、機関車で運んでいたらしい。機関車が村内を走っていた歴史があったのだ。村史を見てもそれらしき林業についての記載がない。

日を改め、慶典さんの案内で実地調査をすることにした。老部川沿いの林道に二又土場があった。機関車やその倉庫、トロッコ 20 台と事務所があったという。老部川を渡る橋があったらしく、川底に下りてみるとコンクリート製の橋台を見つけることができた。また、沢沿いに細い林道があり、レールや電話線を引くときに使った^{がいし}碍子を見つけた。中流の林道脇には、ダイナマイトを保管していた小屋まで残っていた。

その後、最長 9^きの林業用の 1 級森林鉄道が開設されていたことや、保線係と木を切り出す^{やまが}山護係があり、樹齢約 200～250 年の青森ヒバを伐採していたこと、出荷量が日本一の年もあったことなどが分かってきた。忘れ去られていた青森ヒバと六ヶ所森林鉄道の歴史が明らかになりつつある。

現在、林道沿いには森林鉄道の軌道跡や天然ヒバ林も見られ、森林浴にはもってこいだ。新緑の 6 月に軌道跡を歩くと、ハクウンボクの白い花が軌道跡の林道を真っ白に染め、林道脇では黄色いモミジイチゴが鈴なりとなる。これからも歴史的な森林鉄道の軌道跡や、六ヶ所の豊かな自然環境を守っていききたいと思った。（鈴木浩＝六ヶ所村立郷土館館長）

⑧・完 エネルギー関連施設 新たな技術革新に期待



ソーラーパネルと石油タンク、風力発電の風車

盛岡藩は戊辰戦争で敗北し、六ヶ所村にあった藩営牧場の有戸野牧が1873（明治6）年に廃止された。地租改正による金納化も相まって、村の森林の99.6%が国有地となってしまった。「軒下まで国有地」という現実、村民が生活を送る上で大きな障害となっていく。

戦後、軍部の解体に伴い軍馬補充部の放牧場や国有地の一部は、満州や樺太からの引き揚げ者らに払い下げられた。初めは人力開墾が行われ畑作雑穀農業だったが、

1953（昭和28）年の遅霜による冷害と翌年9月の台

風被害により作物は皆無作となり、乳牛を導入して畜産へと方向を転換せざるを得なくなった。現在、緑広がるこの台地は、戦後に理想郷を目指してこの地にやって来た開拓者の汗の結晶である。昭和30年代に入って青森県外への出稼ぎが増え、特に若い人が集団就職などで著しく流出する状況が続き、国の政策からも見放されてきた。砂糖の自由化によるフジ製糖会社の撤退があり、砂鉄を原料としたむつ製鉄所は幻と終わった。発茶沢土地改良事業という村最大の開田事業も、減反政策が始まり費用の回収が不可能となった。

県は、県内で最も所得が低く、国有地が多かった上北地域で工業誘致策を進めた。工業誘致を進める県の施策は、69年5月に新全国総合開発計画が閣議決定され、後の原子力発電所建設を含む重化学工業を中心としたむつ小川原開発第1次基本計画として、国レベルの事業へと展開していく。当初の案では、六ヶ所村のほとんどが工業用地として計画されており、村が消えてしまうのではないかと住民の不安や全国的な公害問題もあり、村民を二分する開発反対運動が巻き起こった。しかし、73年にオイルショックがあり工場の誘致が全く進まず、尾駈沼周辺に開発規模が縮小し、修正されていった。84年7月、電気事業連合会が青森県および六ヶ所村に対し、核燃料サイクル3施設の立地協力を要請し、85年には基本協定の締結に至っている。あくまでも、原子力の平和利用と安全性の確保を前提としていた。

現在、1万人弱の人口の村に、周辺市町村から毎日約7,000人の人々が働きにやってくる。村立郷土館近くの高台からは、核燃料サイクル関連施設や風力発電、太陽光発電施設、国際核融合エネルギー研究センターなど、世界的にも珍しいエネルギー関連施設の一大集積地となった村を見渡すことができる。

かつて放牧された馬の大群が駆け巡ったこの大地から新たな技術革新が起こり、エネルギーに関する課題が解決され、明るい未来がやって来ることを願ってやまない。（鈴木浩＝六ヶ所村立郷土館館長）